

2015. 9. 24 (木)

信じるということ

岡田 弥生

それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。船の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。
(マタイによる福音書 14 章 22-33 節[湖の上を歩く マルコ 6:45-52, ヨハネ 6:15-21])

9月22日に、今学期チャプレン代理を務めてくださる加納先生のメッセージをもって社会学部の秋学期のチャペルがスタートしました。そして今日からのテーマは「信じるということ」です。よく結婚式などで読まれる箇所なのですけれども、コリントの信徒への手紙の13章13節に、移りゆくいろいろな出来事の中でいつまでも存続する価値として聖書は、信仰と、希望と、愛という3つの価値を挙げています。

秋学期のテーマとして、まず信仰すなわち「信じるということ」、その次のテーマが「希

望をもつということ」、そして3つ目のテーマとして「愛するということ」となっています。例年でしたら社会学部の先生の担当は多くても6~7名なのですが、今年はなんと総勢12名の先生方が担当してくださいますので、ぜひ、楽しみにしててください。

私たちの日常と信じるということ

皆さんは、きょうの聖書箇所を読まれてどう思われたでしょうか。何か信じ難い奇跡物語で、現実離れているという感じを抱かれ

たでしょうか。先ほど述べましたように今日のテーマは「信じるということ」です。「わたしはキリスト教とか特別な宗教を信じているわけではないので、無縁のことだ」と思っておられるかもしれません。しかし、信じるということは、哲学的な定義を考えると難解になるかもしれませんが、案外、われわれが日常的に行っている精神的な行為なのです。例えば、今日皆さんは、雨の中ですが、多くの方は阪急電車を利用して大学に来られたと思います。乗車するにあたって、どうでしょうか。大きな決心が要ったでしょうか。これから阪急電車に乗るのだということにおいて、あまり深く考えずに飛び乗ったのではないのでしょうか。阪急電車が最寄りの駅の甲東園なり仁川なりに無事に運んでくれると暗黙のうちに信じて、身を委ねるといふか、信じて乗ってこちらに来たわけです。理屈で言えば、そのようなことですね。

交通機関の話をするので、この夏休みに自動車の運転免許を取った人はいますか、いませんか。中にはいらっしゃるかと思ったのですが、私自身は、学生時代、特に箱入り娘ではありませんが、親が「危ないから」と反対しましたので免許を取得することができませんでした。妹はちゃっかりして親に隠れていつの間にか免許を取っていましたが、私は結婚してからチャレンジしました。学科はすっとパスしたのですが、路上試験当日が、あいにく、今日のような雨で、自分では確認していたつもりなのですが、教習場を出たとたん同乗していた教官に「歩行者を見ていなかった」と指摘されてアウトになりました。ですから1回落ちてしまい、2回目で何とか合格しました。そのように苦労をして取った運転免許ですが、実は長年ペーパードライバ

一で、運転した経験はあるのですが、普段はたいてい夫が運転するのを横から見ていてというか監視する立場にいます。見ていると夫は何気なく当たり前のように運転しているのですが、不思議だなと思います。お互いの信頼関係、例えば、対向車はこちらに向かって来ないで、きちんと路線を守るとか、前に走っている車がめったなことでは急ブレーキを掛けないとか、ドライバー同士が様々なルールを守ることが暗黙のうちに信じられて、運転ということが成立しているのだと思います。車の運転を例にとりましたが、案外そのような出来事が、私たちの身近には多いと思います。

杞憂（きゆう）という言葉がありますね。中国古代の杞の人が天が崩れ落ちてこないかと心配したという故事に由来している言葉ですが、必要のないことをあれこれと心配すること、取り越し苦労のことをいいます。でも、どうでしょう。本当に天が落ちてこないという保証はどこにあるのでしょうか。ある意味、私たちが生きているということは、一寸先は闇ということもありますが、いろいろ予測できない事態があります。飛行機がビルに意図的に突っ込むというような9.11のようなこともありましたし、今日の異常気象のような状況が続けば、何が起こるか分かりません。そのような中で、ある意味、私たちが平然と生きているということは、すごいことだと思いませんか。それこそ意識しなくても、私たちは、天が崩れ落ちることはないし、急な災害が今降って起こってくることはないと思じているのです。

翻って考えてみると、私たちが生きているにはいろいろな条件が必要です。生きていくために必要不可欠なものといえば、皆さんは

何を思い浮かべられるでしょうか。基本的には、空気であったり、水であったり、安全な場所であったり、本当に多くの要素が整えられて、そして、それらは急になくなったりはしないと信じて今ここにあるという状況が成立しているのだと思います。そしてその中のものは、何一つ自分で生み出したものではありません。空気を一生懸命つくっているわけでもないですし、まさに、生きているというよりも、私たちはいろいろな条件に支えられて、生かされて今ここにあるのです。そして、私たちはいわば暗黙のうちに、神様からのプレゼントとしてそのような状況を信じて受け止めて生きていると言えるのではないのでしょうか。

湖の上を歩くイエスの言葉と、 存在への勇氣

さて、本日加納先生に読んでいただいた箇所に戻りますが、湖の上をイエス様が歩くという話です。パラグラフのタイトルの下に書かれていますように、この話はマルコによる福音書、ヨハネによる福音書にも同じ箇所を取り扱った記事が載っています。時間がある時に、皆さんも読み比べてみてください。同じ出来事を記しているにしても、少しずつ観点によって記述が違います。しかし、共通して、この出来事に至るまでのイエス様の生涯の要旨は、次のようなことです。

イエス・キリストはクリスマスに誕生されて、成人してバプテスマのヨハネから洗礼を受けられ、そして30歳になって公の生涯に踏み出されました。まず4人の漁師をお弟子さんとして招集され、やがて12人となるのですが、彼らとともに、病人を癒され、教

えを説かれました。その中には、皆さん、覚えていらっしゃるでしょうか。「山上の説教」がありますね。キリスト教学などで習われたかと思いますが、その中でイエスはどのような教えを説かれたのでしょうか。倫理の教科書などにも書いてあるかもしれません。

私は、ミッションスクールの中学校を受験する時に初めて聖書を分かりやすく説明した『聖書物語』という本を読んで山上の説教の一節を知ったのですが、マタイによる福音書の5章43節にこうあります——「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」。そのイエスの言葉が心に突き刺さったといいますか、非常に衝撃を受けました。敵というのは本来憎む対象だと思っていたのですが、それを、むしろ敵を愛し、そして敵のために祈りなさいとイエス・キリストは言われているのです。まさに目から鱗の驚くべき価値観でした。

この他にもイエス様は神の国に関する多くの教えを説かれ、そして病人を癒され、(だいたいその教えにおいては例えを用いて話されたのですが)「だれでも疲れている者は、わたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と人々を招かれました。

しかしマタイによる福音書14章に至るまでの出来事の記述をずっと見ますと、悲劇も起こっているのです。14章の冒頭、27ページの下段に書かれています。イエスに洗礼を授けたヨハネが殺されてしまいました。詳しい状況は読んでいただいたら分かりますが、ヘロデ・アンティパスという当時のイスラエルの領主(在位BC4-AD39)が、自分の結婚に反対しているヨハネを良く思っていなかったということが前提にあるのです。そのヘロデ王の娘が誕生日に踊りをおどっ

て、ご褒美に「何でもあげるから」と言われて「では、ヨハネの首をください」と応えるわけです。そして14章11節に書かれているように、ヨハネの首は盆に乗せられて運ばれ、少女に渡り、ヨハネの弟子たちが死体を葬り、イエスに報告したとあります。なんと凄惨な出来事でしょうか。そのようなこともイエスが宣教活動をしている時に起こっているのです。そしてその次に、イエスのお話を聞こうとして集まってきた5,000人余りの人に対して、5つのパンと魚2匹しかない状況でしたが、イエスがそれを彼らに分け与えられると、不思議なことに、皆が食べて満足したという記述があります。そして今加納先生に読んでいただいた、湖の上を歩くという出来事が起こっているのです。

私はこの記事が、深い象徴性に満ちているようで、とても好きです。私はアメリカ文学を専攻していて、その研究対象の一人としてウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) という南部作家がいるのですが、そのフォークナーもこの箇所からインスパイアされて、時間とキリストという彼の主要テーマのヒントを得ています。

皆さんは、この箇所を読んでどのように思われたでしょうか。この箇所の意図するところは何か。イエス・キリストを信じれば、イエス・キリストのように湖の上を歩くことができる、そして奇跡を起こすことができるというようなものでしょうか。そうではありませんよね。奇跡が実際に行われたかどうか、それを検証することはできません。そして、そのことを問題にしても何も始まらないと思われま

むしろ、ここでは、逆風の中で不安におびえていた弟子たちに、イエスが掛けられた言

葉に注目したいと思います。真ん中あたりです。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」英語の聖書には、“Take heart, it is I; have no fear.”と書かれています。マルコによる福音書にも同じ言葉が記されています。ヨハネによる福音書では少し違い、“It is I; do not be afraid.”と記されています。しかし共通して、大変力強いお言葉です。初めに少し考察しましたが、私たちが日々生きていくためにはいろいろな条件が必要です。いわば私たちは、大海に毎日放り出されているような状況かもしれません。その中で多くの支えが必要です。しかし、そのような嵐の中にいるような私たちに、イエスがそばにいて励ましてくださっているということ、そこに、この話の中心的なメッセージがあると思われま

す。パウル・ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965) というアメリカの神学者が著した『存在への勇気』 (*The Courage to Be*, 1952) という書物がありますが、私たちは不安に満ちた世の中に生きていて、先の見えない毎日を生きていくためには根源的な勇気が必要な存在です。ではどこからその存在への勇気を得られるでしょうか。

春学期の終わりのチャペルメッセージで、イエスが「わたしが道であり、真理であり、命である」(ヨハネによる福音書14:6)と語っておられる箇所をご紹介しましたが、その道であり、真理であり、命であると言われるキリストが、ある意味、嵐の中を生きていくような状況にある私たち一人一人のそばにいて「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と声を掛け、存在への勇気を与えてくださるのです。それが聖書が伝えているメッセージです。

今、皆さんの前に立っている私にも不安があります。しかしイエス様が「安心なさい。わたしたち、恐れることはない」とお言葉を掛けてくださっている、そのお言葉を信じ、心強くしてこの場にいます。先ほど『讚美歌21』の57番を歌いましたね。もう一度讚美歌を開いて2番の歌詞を見てください。ちょうどこの聖書の箇所(ルカ21:19)にぴったりです。この箇所を基にした歌詞ですね。「嵐の日波たける湖で 弟子たちを諭された力の御言葉を わたしにも聞かせてください。」一言お祈りいたします。

私たちに父よと呼びかけることをゆるしてください。天の父なる神様、この素晴らしい秋の日にチャペルに集まり、あなたの御言葉を聞くことができましたことを感謝いたします。私たちはいわば逆風の

中、大海に投げ出されているように思え、不安で胸がいっぱいになるものでございます。しかし私たちは生きていうより、あなたが与えてくださっている多くの人や、事柄に支えられ生かされている存在です。どうかあなたを信じ、その御言葉に支えられて、本日も生きていくことができますように一人一人をお導き下さい。そして自分のためだけに生きるのではなく、勇気をもって心を開き、隣人のためにできることをさせてください。戦争や災害に苦しむ多くの方々のために祈ることができますようにお導き下さい。この貧しいお祈りを力強い御言葉をもって常に私たち一人一人を励ましてくださるイエス・キリストのお名前によって御前にお捧げ致します。アーメン

(社会学部教授)